

〈歴史パネル〉

ロンドン外国為替市場から見た 1931 年「ポンド危機」
—為替レートの反応の観察—

一橋大学大学院生 高橋 秀直

本報告の目的は、1920年代に台頭したロンドン外国為替市場の観点から1931年の「ポンド危機」を再検討することである。その際、直物および先物為替レートの反応に着目する。まず、1920年代におけるロンドン外国為替市場の台頭・機能およびイギリスの金本位制再建をめぐる動向を概観する。特に1925年のイギリスの金本位制再建後も、ロンドンにおいて先物為替市場が十分に定着・機能していたことを重視する。それを踏まえて、イギリスの金本位制離脱を後押しした1931年の「ポンド危機」の発生前後において、ロンドン市場におけるポンド・ドル直物レートと先物レートの反応に違いがあることを確認する。その事をポンド平価維持に対する市場の信認の低下の表れとして解釈する。また、ロンドン市場の為替レートの反応に「ポンド危機」前後の国際経済動向がどのように表れていたのかについても、ロンドン市場におけるポンド・マルクレートの反応等も観察することで確認する。

[参考文献]

- 高橋秀直「短期市場金利と裁定行動—再建金本位制下のロンドンとニューヨーク市場—」
『社会経済史学』71巻3号、2005年9月。
- 高橋秀直「1931年の『ポンド危機』—ロンドン外国為替市場における直物・先物レートと
ビッド・アスクスプレッドの検討—」『社会経済史学』75巻3号、2009年5月。